

福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	2019年度看護学部学術委員会（学内学術交流推進小委員会）報告：学術活動
Author(s)	看護学部学術委員会（学内学術交流推進小委員会）
Citation	福島県立医科大学看護学部紀要. 22: 37-38
Issue Date	2020-03
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1301
Rights	© 2020 福島県立医科大学看護学部
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2023-05-04T20:32:22Z

学 術 活 動

2019年度 看護学部学術委員会（学内学術交流推進小委員会）報告

看護学部学術委員会（学内学術交流推進小委員会）

1. はじめに

学術委員会は、看護に関する研究・実践・教育の学術向上のために、学外・学内の学術交流の方針やあり方を検討する委員会である。2019年度は、3つの小委員会（学外学術交流推進小委員会、学内学術交流推進小委員会、研究活動広報小委員会）に分かれて活動をしてきた。今回は、学内学術交流推進小委員会の活動について報告する。

学内学術交流推進小委員会は、看護学部の各教員が取り組んでいる研究・実践・教育活動を教員間で共有し、お互いに刺激し合ったり、学んだりすることで、各教員の学術活動を更に高める機会を作ることを目的に活動している。本年度は昨年に引き続き「My Premium（マイプレミアム）を語る会」と称し、教員の取り組みを紹介して、そのテーマに関連することについて意見交換する会を3回企画した。

2. 活動紹介

1) 第1回「My Premium を語る会」

日 時 2019年6月21日(金) 16時30分～18時

テーマ 「発達障害の疑いのある学生への配慮と支援について ～自閉症スペクトラム障害(ASD)の理解と支援～」

講 師 家族看護学部門 講師 佐藤 利憲 先生

内 容

自閉症スペクトラム障害の特徴や、併発しやすい二次障害についての説明と、そのような特徴をもつ方への配慮や支援の具体的なポイントに関して講演していただいた。

参加者からは質問が多く出され、その後のグループワークでも活発な意見交換が行われた。看護学部の教員にとって教育は重要な欠かせない職務であり、特に実習では学生と深く関わることになる。学生の特性を十分に理解し、学生のもつ本来の力を発揮できる教員の関わりや環境の作り方を学ぶ機会となった。

2) 第2回「My Premium を語る会」

日 時 2019年7月26日(金) 16時30分～18時

テーマ 「科研費採択への道」

講 師 療養支援看護学部門

教授 坂本 祐子 先生

基礎看護学部門

講師 加藤 郁子 先生

内 容

科学研究費の助成を採択することができるよう、実際に採択を受けられたお2人の先生のご経験をもとに、科研の申請・採択に向けてのポイントをお話していただいた。

坂本祐子先生からは、「科研が書けた」と題して、申請にあたっての研究遂行能力の訴え方や、申請区分の選び方のポイントを具体的にお話していただいた。現在の科学研究費助成事業の傾向や、申請書の変更などの最新情報を詳細に分析して申請書を作るという、申請に臨む姿勢を教えていただいた。

加藤郁子先生からは、採択に至るまでのプロセスを詳細に伺い、看護実践と研究課題、研究目的に関連させて洗練していく積み重ねを学ぶ機会となった。

お2人の講師から、実際に作成した申請書を見せていただき、伝えたいことを強調して簡潔にするために図式化するなど、審査員の関心をつかみとる工夫も学ぶことができた。参加者にとって、科研費申請のための実践的な学びを得る貴重な機会となった。

3) 第3回「My Premium を語る会」(予定)

日 時 2020年3月11日(水) 13時～14時

テーマ 「自分なりの研究への取り組み」

講 師 母性看護学・助産学部門

助教 森 美由紀 先生

内 容

研究に取り組み始めた教員が研究者として育っていく過程を応援することを目的に企画した。大学院の修士課程を修了した教員を講師に迎え、取り組んでいる研究について、着想に至った動機や研究課題

の絞り込みのプロセスなどについて話しを伺う予定である。

3. おわりに

大学教員として日々、研究・実践・教育活動に取り組んでいるが、お互いの活動を知らないことも多い。「My Premium を語る会」を通じて各教員の活動を知ることはもちろん、それぞれの専門分野の広さや深さを学ぶ機会となっている。この会での交流が、新たな研究や実践のアイデアを考えたり、教育を深めたりする機会となり、看護の質の向上に貢献できる学術活動につながることを期待する。

学内学術交流推進小委員会として、今後も教員がお互いをますます刺激し合い高めていけるような学術交流の機会を企画していきたいと考えている。